

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04121

研究課題名（和文）ケア包摂型コミュニティのダイナミズムと開発主体アソシエーションに関する臨床研究

研究課題名（英文）Practical study on the dynamism of care-inclusive communities and development-based associations

研究代表者

津止 正敏（TSUDOME, MASATOSHI）

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：70340479

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ケアが一般化する高齢社会における社会問題・社会運動・社会政策のインターフェイスとして「ケア/ケアラー」を焦点化し、そのアソシエーションがいかなる今日的意義と課題を有しているかについての臨床的検証を行い、以下の結論を得た。「ケア/ケアラー」があらゆる政策領域で中心舞台へと押し出されていること。近年の著しい「ケア/ケアラー」の多様化を、本研究では「新しい介護実態」として特徴づけたこと。ケアを紐帯とするコミュニティの開発主体としてケアのアソシエーションが機能していること。以上の3点をエビデンスに、介護のある暮らしを社会の標準にするという政策的課題を提起した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では「ケア/ケアラー」・社会資源・アソシエーションの三者をフィールドにして、現地踏査、参与観察、インタビュー、ワークショップなどを駆使し、ケアの現場臨床による理論構築を目指した。「ケア/ケアラー」アソシエーションが発揮する社会機能の実証的研究を介在させて、「ケア/ケアラー」・社会資源・アソシエーションという社会実践への応用という波及効果のある研究ともなった。また、ケアを巡るジェンダー意識の揺籃という時代認識から、各地で胎動する男性介護者のアソシエーションを焦点化し調査・分析対象としてきたことから、男女共同参画社会における新たな「生き方モデル」を提示する男性学研究ともリンクした。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on "care/carers" as an interface of social problems, social movements, and social policies in an aging society where care is generalized. We conducted a practical verification of what significance and issues the association had. The following conclusions were obtained. (1) "Care/Carers" are being pushed to the central stage in all policy fields. (2) In this research, the remarkable diversification of "care/carers" in recent years was characterized as "new nursing care reality". (3) It was verified that the care association is functioning as a development body of the community with care as a tie. Using the above three points as evidence, he raised the policy issue of making living with nursing care a social standard.

研究分野：社会学(社会福祉含)

キーワード：ケア ケアラー コミュニティ アソシエーション 男性介護者

1. 研究開始当初の背景

本研究の主題である「ケア/ケアラー」は、家族等無償の介護者とその介護実態を意味するが、近年最も拡張し深化した社会・研究領域の一つとなっている。ケアに関わる研究動向はこれまで主流であったケア・スキルの高度化やケア人材養成に係る教育という部門を遥かに超えた広大な学際領域を形成しつつある。福祉や看護・介護・心理という対人援助学分野はもちろん社会学・経済学・哲学・政治学・情報工学等々学際的な広がりを持ちながら精力的に展開されている。コミュニティ領域でも無援社会など社会変容を軸にケアとの相関性を問うテーマに改めて関心が集まっている。そして高齢者介護が虐待・心中・殺人という不幸な事態に接続され、社会生活からの排除をもたらす不安要素として可視化している状況から、「ケア/ケアラー」一般ではなくその属性等アイデンティティに着目した新たな組織化活動やケアの社会運動も生まれている。本研究はケアが一般化する高齢社会における社会問題・社会運動・社会政策のインターフェイスとして「ケア/ケアラー」を焦点化しているが、ケアを巡る学際的臨床的アプローチという今日的な学術的動向に動機づけられている。こうした学際的研究の動向は先行研究レビューにおいて包括的に把握してきた。

「ケア/ケアラー」とそのアソシエーション(介護者組織)の変容という今日性も本研究の背景要因となっている。かつてケアされる本人と不可分のものとされてきた「ケア/ケアラー」はその後の福祉の理念や制度の進展の中でケアされる本人とは相対化されるもうひとりのケアを必要とする人という主張への理解も広がった。本研究ではこうした介護者組織の歴史を追う中で、その今日的な意味すなわち急速に進行する高齢社会におけるケアが仲介する新しいコミュニティの開発主体としての社会機能を問う臨床研究となった。介護者組織が脚光を浴びるのはこれまでも幾度かあったが、いま社会的関心の舞台上上がっているのはもはや一括りされるような均一の対象ではない。男性やヤング、シングル、有業、別居、遠距離、若年認知、難病など介護する人/される人の多様で複雑な属性に着目したワンイシュー型の小さなアソシエーションであり、主宰者も当事者だけでなく公私の多様化したアクターであることも、本研究の背景要因となった。

2. 研究の目的

本研究は、「ケア/ケアラー」という社会層とそのアソシエーション(介護者組織)及びケアの社会資源を構成要素として形成される場を「ケア包摂型コミュニティ」と概念化してきた。そしてアソシエーション(介護者組織)を「ケア包摂型コミュニティ」の主たる開発主体として主題化し、その現場に立ち入った臨床研究によって、それが発揮する社会的機能の今日的意義の解明と、「ケア/ケアラー」支援の理論的政策の根拠の構築を図っていくことを本研究の目的として設定した。

3. 研究の方法

本研究は、「ケア/ケアラー」を起点にしてケアを包摂するコミュニティとそのアソシエーション(介護者組織)、社会資源に関して、研究者と実践現場との学際的研究組織を構築し、現地踏査、参与観察、インタビュー、ケーススタディ、ワークショップなどという臨床的研究方法を採用した。ケア包摂型コミュニティの概念化の作業を「ケア/ケアラー」のアソシエーションという具体的フィールドにおいて展開していくとともに「ケア/ケアラー」のアソシエーションの生成支援という組織化等の社会実践に貢献することも視野に置きながら、理論と実証の往復作業を4年時にわたって推進してきた。筆者が役職を務める諸団体(男性介護ネット・傘下団体、認知症の人と家族の会・各支部、NPO、社会福祉協議会等)に、本研究への協力・連携を依頼してきた。

4. 研究成果

本研究によって新たに付加した知見は以下の通りである。

(1) 「ケア/ケアラー」の変容実態

「ケア/ケアラー」の変容を、本研究では「新しい介護実態」と規定しておおむね次のように捉えてきた。

その第1は、介護する人が、この社会でこれまで前提とされてきたものとは全く異にするということである。初めて全国規模で実施された介護実態調査(「全国寝たきり老人実態調査」全国社会福祉協議会、1968年)では主たる介護者の9割以上が女性であったことが指摘されているが、半世紀を経た今その状況は激変している。介護する夫や息子はいまでは同居の主たる介護者の中で3人に1人(34.0%)を占めるに至っている(『平成28年国民生活基礎調査』)。続柄の変容も激しい。先の全国調査で主たる介護者の半数を占めた「子どもの配偶者(嫁)」は介護者続柄では、妻や娘はおろか夫や息子をも下回る最も少数派となっている。これまで在宅で介護を担う人といえば「若くて、体力もあり、介護も家事も難なくこなして、介護に専念できる立場にあり、さらに介護者役割を自ら内面化している」ものであり、女性・専業主婦をモデルとしたものであった。しかし、今この社会で在宅介護の役割を担っているのはこれとは真逆の介護者ばかりだ。「想定外」の介護者の出現である。

第2は、介護サービス等介護資源の社会化である。上述の初の全国調査では、介護のほとんどすべてが家族/女性の手に乗ねられていたことを記している。ホームヘルプやディサービス

など在宅福祉などは全く未開発の時だった。それ故、約 20 万人と推計された寝たきり老人のうち 19 万人余りが家族だけの介護で暮らしていたことも報告されている。介護はすべて家族の中で成されていた。この時期の福祉は、全国にわずか 4 千 5 百床しか整備されていなかった特別養護老人ホームに象徴されるように、限定的救済的で極端に周辺化された施策に過ぎなかった。その後の「福祉元年」(1973 年)や「ゴールドプラン」(1989 年)、「介護保険制度」(2000 年)など福祉や介護の政策化・事業化はこうした環境を劇的に変えたようだ。介護サービスを取り込む暮らしが一般化し、実態的な課題はなお多くを残しつつも少なくともその理念としては「何時でも誰でも何処でも必要な時に」利用できるユニバーサルな制度として社会的合意を得るようになってきている。

そして第 3 は、「ながら」介護(樋口 2017)という介護形態である。介護に専念し得る家族の存在こそがこれまでの在宅介護を可能ならしめ、既存の介護システムの要として機能してきた。家族介護は日本社会の美風でありかつ介護の含み資産だといわれてきたのもこの介護に専念しうる家族介護者があればこそであった。3 世代・4 世代同居・近居という大家族から核家族化・単身家族化への劇的な移行、そして女性の就労や社会参加の著しい進展は、介護に専念し得る家族の選択性を失くした。今増えている介護する家族の実態の多くは、次に示すような「ながら」の介護である。別居、遠距離で通い「ながら」介護する、子育てし「ながら」介護する、修学・就活・婚活し「ながら」介護する(澁谷 2018)、通院・通所し「ながら」介護する、そして働き「ながら」配偶者や親を介護する、という介護のカタチだ。

(2)「ケア/ケアラー」組織の「社会機能」

家族会や介護者会などは、セルフヘルプグループ(自助組織)や当事者組織と呼ばれ、その意義や役割については多くの実践や研究の蓄積がある分野ではある。介護を縁として繋がる会や集いが発揮する社会機能は、幾つかの先行研究では次のように指摘されてきた。

ともに同じ課題を抱えた当事者同士の感情交換の場が発揮する力を、認知症の人と家族の会発足当初から医師という専門的支援者の立場で関わっていた三宅貴夫は、こうした家族同士の組織が発揮する力を総括して「家族の交流、正しい知識と理解の普及、社会的援助の充実に求める」とまとめた。三宅は「(高齢者分野では初めての家族の会の結成は)同じ悩みを持つ家族だけでなく保健・医療・福祉にたずさわる人々、行政、そして広く社会への影響は大きいものであったと考える。それはあの有吉佐和子の『恍惚の人』を凌ぐといってもよからう」(三宅 1986)と記しているが、家族同士の交流というすこぶるシンプルな動機の後を見通したものだ。当事者の交流が広がり集まって巨大な貯水池として成すエネルギーは、認知症に対する正しい知識や理解を促進することにも、社会を変えうることにもなるいわば社会運動の原動力だということだ。その後の家族の会が発揮している社会的政治的な影響力は、40 年前に三宅が評した通りになっている。「家族の交流」という素朴な取り組みが巨大な社会変革のエネルギーとどう関連するか。その関連性は歴史的にみれば多分に普遍的で貫通的なものではあるとしても、必ずしも可視的直線的な関係ではないことも事実ではある。家族の会結成から 40 年が経過した今でも、こうした小さな「家族の交流」の場を意義あるものとして構築することの重要性に改めて注意を喚起したいという本研究の動機もそこにある。

こうした先行研究と実践の知見に学びつつ、本研究では、介護者組織が発揮する社会機能を、同じ立場の人との「出会い」の場、プラス、マイナスも含めた「介護感情」が吐露できる場、介護者視点からの「情報」が交差する場、介護者の経験が「知」として生きる場、これまでの介護生活の「振り返り(reflection)」の場、介護者運動のカマドとしての場、の 6 点にまとめた。それはまた、「他者」を鏡にして自己を振り返る共感・肯定感を育む場であり、さらに「私」にはじまる個人的経験を「私」を超える社会性に孵化していく場である。当事者の集団形成という組織化活動は、両者を架橋しつつケアの側から個人と社会の変革をも見据えた動力ともいえよう。

(3)男性介護者の「ケア・コミュニティ」

本研究のもう一つの主題は、ジェンダー平等に向かう男性側からのアプローチの検討にあった。男性介護者を対象にした会や集いを主宰する団体は私たちが把握しているだけでも 150 を超えている。本格的な調査をすればさらに多くの会が活動しているに違いない。もちろん、こうした「コミュニティ」も万能ではない。傷の舐め合い、介護を舞台とした男らしさの「競演」等々批判の声もある(平山亮 2017)。しかし、これまでは例外であり特殊とされてきた夫や息子という介護者同士だからこそ広がり深まる共感のネットワークということも確かな実感として語られている。増えたといっても男性介護者は 30% 余り、やはり介護者の多くは女性、だから当然介護者の会のメンバーも女性が多くを占める。男性介護者への理解やその可視化はそれほど進んではない。辛いときには泣いても愚痴ってもいい、我慢しないで SOS を発信して、というのが「介護者になったからといっても、すぐには泣けないんですよ！」という男性がいた。

感情的にならずに、論理的な思考で、分析的、沈着冷静に状況に対処することを叩き込まれて生きてきたのだから、という。用件伝達には長けていても、気持ち伝えることは不得手な男性の声である。仕事中心、経済優先の文化で長らく過ごしてきた男性が、これまでの鎧兜を脱ぎ去って家族のケアを担うという新しい文化を築けるか、という課題だ。こう考えると、夫や息子たちという立場を同じくする介護者同士のネットワークで生成されているような、他者を鏡としな

がこれまでの自身の介護を振り返り、共に支え合う自助的な「場」での交流は、回り道のようにあるがジェンダー平等には極めて有効であった。

苦しいこと、云いたいこと、不満なこと、腹の立つこと、泣きたいこと、これらをじっとこらえてゆくの「男の修行」だ、と言ったのは山本五十六だが、私たちはこう言おうと思う。恥ずかしながらに我慢しないで大声上げて泣いても助けを求めてもいい。あなたと同じ仲間も大勢いるんだから、と。男性学研究の第一人者、伊藤公雄もその著(1996)で、「もっと群れよう、男性たち！」と檄を飛ばしているが、男性の「ケア・コミュニティ」は、最も色濃くジェンダー規範に絡め捕られながら、それでもジェンダー平等に向かわざるを得ない男性たちの修行の場である。

(4)「ケア包摂型コミュニティ」

本研究報告の結びに、介護するということ、されるということは人間社会においてどのような意味を持っているかについて考えてみた。このことは、介護する家族の会や集いなどのケアを紐帯とするコミュニティの評価にもかかわるテーマでもある。ケアは社会に真っ当な評価を受けていないのではないが、何か人間社会の主流から外れ、周辺化された特殊な世界のことでないか、ということであれば、ケアのコミュニティにもそうしたネガティブ評価が付きまとうであろうし、そうではなく、樋口恵子が男性介護者と支援者の全国ネットワークの発会式(2009年)に寄せたメッセージのように「介護することは人間の証明です」というのであれば、ケアのコミュニティこそが人間社会の最も普遍的な姿を先取りしているともいえよう。誰にも頼らずに自分自身の力だけで生きているものは誰ひとりとして存在していないのであって、相互依存関係は現代社会を特徴づける象徴といえよう。この依存的関係をその発生の期から形成してきたケアを社会の中核に据えようという主張の根拠でもある。

朝が繰ると とび起きて / ぼくが作ったのでもない / 水道で 顔をあらうと / ぼくが作ったのでもない / 洋服を きて / ぼくが作ったのでもない / ごはんを むしゃむしゃたべる / それから ぼくが作ったのでもない / 本屋ノートを / ぼくが作ったのでもない / ランドセルに つめて / せなかに しょって / さて ぼくが作ったのでもない / 靴を はくと / たったか たったか でかけていく / (以下略)(まど・みちお「朝がくると」)

上記は、まど・みちお「朝がくると」の一節だが、「ぼく」がいうように確かにみんな誰かの労働の果実に依存しながら暮らしているのであるが、そのことが気付きにくく実感することが難しいという、私たちが暮らす社会の特徴を余すところなく描き出している。こうした、人と人の / 人と環境の無尽の相互依存関係が、この社会の本質的な存立条件なのである。

不可視化する相互依存の人間関係がクリアに映し出されてくるのが私たちのケア領域といえよう。その意味では、ケアのある暮らしを経験することは真に人間の顔をした関係を紡ぎうる世界に接続されているのではないか。これはケアに携わる私たちの希望である。

人は決して完全なものではなく、支え合い助け合いながら生きているのだ。不完結さを認め合うが故に他者や環境の助けを借りながらより良い関係を築いていこうという欲求もうまれるのだ。人間の弱さが人とのつながりをより深め、人生を豊かにしていくのだ。これこそが「ケアレスマンモデル」とは対極にある普遍的な人間像であり社会像なのだ、私は考えている。

私が本研究で主題とした「ケア包摂型コミュニティ」とは、介護のある暮らしが標準となる社会のことともいえよう。

(引用文献)

* 伊藤公雄 『男性学入門』 作品社、1996

* 澁谷智子 『ヤングケアラー 介護を担う子ども・若者の現実』 中公新書、2018

* 樋口恵子 『その介護離職、おまちなさい』 潮新書、2017

* 樋口恵子 『男性介護者支援者の全国ネットワークご発足にあたって ごあいさつ』 同ネットワーク 『10周年記念誌』 2020

* 平山亮 『介護する息子たち：男性性の死角とケアのジェンダー分析』 勁草書房、2017

* まどみちお 「朝がくると」 『日本語を味わう名詩入門(第3期) まど・みちお』 あすなる書房、2013

* 三宅貴夫 『ぼけ老人と家族への援助』 医学書院、1986

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 津止正敏	4. 巻 Vo25 1
2. 論文標題 家族介護者の変容と介護問題研究の課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本看護福祉学会誌	6. 最初と最後の頁 34-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 津止正敏	4. 巻 102(6)
2. 論文標題 高齢者を介護する家族への支援の現状と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 月刊福祉	6. 最初と最後の頁 44-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 津止正敏	4. 巻 699
2. 論文標題 男性の介護労働-男性介護者の介護実態と支援課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本労働研究雑誌	6. 最初と最後の頁 40-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 津止正敏	4. 巻 VOL13 1
2. 論文標題 仕事と介護の両立を考える-「ながら」介護の実態から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 季刊個人金融	6. 最初と最後の頁 44-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津止正敏	4. 巻 26巻37-48号
2. 論文標題 男の介護(連載1~12)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 週刊金曜日	6. 最初と最後の頁 46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津止正敏	4. 巻 51
2. 論文標題 男性が介護を問う意味 - 男女共同参画の時代を生きる -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ぴゅあ	6. 最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津止正敏	4. 巻 28
2. 論文標題 家族介護者を支援する - 支援の根拠と枠組み -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 老年精神医学雑誌	6. 最初と最後の頁 918 927
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津止正敏	4. 巻 459
2. 論文標題 介護者が前向きに生きられる社会を	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 女性のひろば	6. 最初と最後の頁 66-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津止正敏	4. 巻 2539
2. 論文標題 介護をめぐる課題と展望	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 生産性新聞	6. 最初と最後の頁 7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津止正敏	4. 巻 VOL.44
2. 論文標題 男性介護者への社会的関心の広がりが意味すること - 介護のある暮らしを社会の標準に -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 男女共同参画通信	6. 最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津止正敏	4. 巻 通巻124
2. 論文標題 一人で抱え込む男性介護者への生き方モデルを	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 公明	6. 最初と最後の頁 22-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津止正敏	4. 巻 -
2. 論文標題 孤立しがちな男性介護者...悲劇を生まないためには	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 YOMIURI ONLINE	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 9件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 津止正敏
2. 発表標題 日本の家族介護者支援の現状と課題
3. 学会等名 2019年度日韓交流・啓発セミナー「日本と韓国認知症介護で拓く未来」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 津止正敏
2. 発表標題 大介護時代の地域福祉 - 民生委員の歩みに学ぶ -
3. 学会等名 京都市民生委員・児童委員及び主任児童委員委嘱状伝達式（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 津止正敏
2. 発表標題 仕事と介護を両立すること
3. 学会等名 第32回日本看護福祉学会(市民公開講座)（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 津止正敏
2. 発表標題 具体的養護者支援について
3. 学会等名 第15回日本高齢者虐待防止学会泉州大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 津止正敏
2. 発表標題 少子高齢社会の男と介護-介護する・介護されるをめぐって
3. 学会等名 「生き方・死に方フォーラム」研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 津止正敏
2. 発表標題 認知症に関わる当事者団体の役割と今後の課題(ワークショップ)
3. 学会等名 第32回国際アルツハイマー病協会(ADI)国際会議（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 津止正敏ほか5団体
2. 発表標題 日本の当事者団体・あつまる
3. 学会等名 認知症の人と家族の会/ADI2017国際会議プレイベント実行委員会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 津止正敏
2. 発表標題 ケアラー支援を考える-家族介護の実態から
3. 学会等名 平成28年度大阪府介護者(家族)の会全体活動交流会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 津止正敏
2. 発表標題 男性介護者と社会情勢について
3. 学会等名 認知症介護指導者大府ネットワーク全体研修会（招待講演）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 石田一紀・池上惇・津止正敏・藤本文朗	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新日本出版社	5. 総ページ数 315
3. 書名 長寿社会を生きる - 健康で文化的な介護保障へ	

1. 著者名 津止正敏	4. 発行年 2019年
2. 出版社 立命館大学人間科学研究所男性介護研究会	5. 総ページ数 94
3. 書名 ケア・コミュニティの臨床-介護のある暮らしを社会の標準に	

1. 著者名 益川敏英、池田武邦、市川たい子、津止正敏、飯田進、アルボムツレ・スマナサーラ、柏木哲夫、櫻井美紀、比企寿美子、鈴木せい子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 名著出版	5. 総ページ数 161
3. 書名 NHKラジオ深夜便 こころの時代 インタビュー集1	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----